

〈巻頭言〉

初年次教育学会設立 15 周年にあたって —初年次教育の温故知新—

山本啓一
北陸大学

初年次教育学会は 2008 年に設立され 2023 年度で設立 15 周年を迎えた。これまで本学会で初年次教育の広がりや深化に貢献していただいた多くの会員に敬意を表したい。

この 15 年間で、初年次教育は大きく発展した。令和 2 年度の文科省の調査によれば、初年次教育を導入している大学は 97% に達する。いまや初年次教育は、我が国の学士課程の中で制度化され、定着した教育プログラムとなったといえる。

本学会では、学会設立 15 周年記念事業として、歴代会長および事務局長の座談会を実施した。筆者はインタビューを担当したが、学会設立に尽力された諸先生方が撒いた種が現在の初年次教育の成果へと確実につながっていることがあらためて実感できる内容である。座談会を文字起こししたのは、近日中に会員のみならず広く一般の方々に向けて公開する予定である。

筆者なりに、座談会で明らかになった本学会の設立秘話をまとめてみたい。

第 1 に、本学会は、当時の北米のファーストイヤー・エクスペリエンスに関する学会の興隆に影響を受けて設立された。ただし、その一方で、当時の大学におけるユニバーサル化の進展という状況と格闘しつつ、豊かな実践事例を現場で生み出していた方々も学会設立に深く関わっていたことは見逃せない。本学会は、理論と実践という 2 つの大きな潮流が合流した地点で誕生した学会なのである。

第 2 に、本学会は、設立当初から研究発表の場であると同時に、初年次教育を実践的に担う会員が大学を超えてつながり、学び合い、ネットワークを形成する場でもあった。筆者自身も、当時開催されていたワークショップで、「ここに自大学・自学部が抱えていた課題を解決する方策がある！」と目を開かされる思いをしたことを思い出す。その後、実践交流会も設立され、地域ごとに学び合いの場を広げられる環境が整った。今後、各地に根ざした実践活動を共有する場としてさらに発展させていくことが望まれる。

第 3 に、本学会の会員は、教育学や高等教育論にとどまらず、多様なバックグラウンドを持つ方々で構成されている。この状況は、初年次教育というディシプリンがいまだ存在しないという課題に通じるものの、学際的な研究を進めることで、本学会の大きな強みへと発展させられる可能性があると思われる。

以上の 3 点は、本学会が現在に至るまで「教育イノベーションを起こすための越境的プラットフォーム」として機能し続ける根源的な DNA のようなものである。学会設立者の意志をふまえつつ、筆者なりに本学会の今後の展望と課題を述べてみたい。

第 1 に、高大接続の進展により、これまで本学会において蓄積されてきた知見は、探求

学習等の高校の活動においても有用になりつつある。そこで例えば、実践交流会において高校を巻きこんで開催することも検討されてもよいだろう。本学会の発展可能性の一つではないだろうか。

第2に、時代の変化とともに初年次教育の絶えざる革新が求められる。今や、DXの進展により、情報リテラシー教育の高度化は初年次教育の主要な課題の一つである。また、従前から「初年次教育については、多様な入学者が自ら学修計画を立て、主体的な学びを実践できるようにする観点から充実を図ること¹」と指摘されてきたが、自律的な学修者の育成は、初年次教育においてさらに重要性を増しているのではなかろうか。

学会設立15周年にあたり、初年次教育のフロンティアを切り開き続けてきた学会設立者の足跡をたどることで、会員各自がこれまで取り組んできた初年次教育の意義をあらためて捉え直し、未来の初年次教育へとつなげるきっかけとなれば幸いである。

本学会のますますの発展と会員のご健勝を祈念し、巻頭言とさせていただきます。

(初年次教育学会理事)

¹ 「『卒業認定・学位授与の方針』(ディプロマ・ポリシー)、『教育課程編成・実施の方針』(パリキュラムポリシー)及び『入学者受入れの方針』(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン」(平成28年3月31日中央教育審議会大学分科会大学教育部会)